

捨兒

芥川龍之介

青空文庫

「浅草あさくさの永住町ながすみちように、信行寺しんぎようじと云う寺がありますが、——
 いえ、大きな寺じやありません。ただ日朗にちろう上人しようにんの御木像があ
 るとか云う、相応そうおうに由緒ゆいしよのある寺だそうです。その寺の門前
 に、明治二十二年の秋、男の子が一人捨ててありました。それが
 また生れ年は勿論、名前を書いた紙もついていない。——何でも
 古い黄八丈きはちじようの一つ身にくるんだまま、緒おの切れた女の草履ぞうりを枕
 に、捨ててあつたと云う事です。

「当時信行寺の住職は、田村日錡たむらにつそうと云う老人でしたが、ちよう
 ど朝の御勤めをしていると、これも好いい年をした門番が、捨児すてごの
 あつた事を知らせに來たそうです。すると仏前に向つていた和おしよ

尚うは、ほとんど門番の方も振り返らずに、「そうか。ではこちらへ抱だいて来るが好い。」と、さも事もなげに答えました。のみならず門番が、怖こわ怖ごわその子を抱いて来ると、すぐに自分が受け取りながら、「おお、これは可愛い子だ。泣くな。泣くな。今日きからおれが養つてやるわ。」と、気軽そうにあやし始めるのです。——この時の事は後のちになつても、和尚おしょう鼻び眞いの門番が、櫛しや線香を売る片手かた間に、よく参詣人へ話しました。御承知かも知れませんが、日に錚そう和尚おしょうと云う人は、もと深ふか川の左官がわだったのが、十九の年に足場から落ちて、一時正しょう氣きを失つた後のち、急に菩ぼ提だい心しんを起したとか云う、でんぼう肌の畸人きじんだったのです。

「それから和尚はこの捨児に、勇ゆう之の助すけと云う名をつけて、わが

子のように育て始めました。が、何しろ御維新ごいしん以来、女氣おんなげのな
 い寺ですから、育てると云つたにした所が、容易な事じゃありま
 せん。守りもをするのから牛乳の世話まで、和尚自身が看經かんきんの暇
 には、面倒を見ると云う始末なのです。何でも一度などは勇之助
 が、風か何か引いていた時、折悪く河岸にしたつの西辰と云う大檀家おおだんか
 の法事があつたそうですが、日錚和尚は法衣ころもの胸に、熱の高い子
 供を抱だいたまま、水晶すいしやうの念珠ねんじゆを片手にかけて、いつもの通
 り平然と、読經どきやうをすませたとか云う事でした。

「しかしその間まも出来る事なら、生みの親に会わせてやりたいと
 云うのが、豪傑ごうけつじみても情じやうに脆もろい日錚和尚の腹だったので
 しよう。和尚は説教の座へ登る事があると、——今でも行つて御

覧になれば、信行寺の前の柱には「説教、毎月十六日」と云う、古い札ふだが下さがつていますが、——時々和漢の故事を引いて、親子の恩愛を忘れぬ事が、即ち仏恩をも報ずる所以ゆえんだ、と懇ねんごろに話して聞かせたそうです。が、説教日は度々めぐつて来ても、誰一人進んで捨児の親だと名乗つて出るものは見当りません。——いや勇之助が三歳の時、たった一遍、親だと云う白粉おしろい焼やけのした女が、尋ねて来た事がありました。しかしこれは捨児を種たに、悪事でもたくらむつもりだったのでしょうか。よくよく問い質ただして見ると、疑わしい事ばかりでしたから、癩かん癬ぺきの強い日錚和尚は、ほとんど腕力を振わないばかりに、さんざん毒舌を加えた揚句あげく、即座に追い払ってしまいました。

「すると明治二十七年の冬、世間は日清戦争の噂に湧き返っている時でしたが、やはり十六日の説教日に、和尚が庫裡くりから帰つて来ると、品ひんの好いい三十四五の女が、しとやかに後あとを追つて来ました。庫裡には釜をかけた囲炉裡いろりの側に、勇之助が蜜柑みかんを剥むいている。——その姿を一目見るが早いか、女は何の取付とつきもなく、和尚の前へ手をついて、震える声を抑えながら、「私わたしはこの子の母親でございしますが、」と、思い切つたように云つたそうです。これにはさすがの日錚和尚も、しばらくは呆氣あっけにとられたまま、挨拶あいさつの言葉さえ出ませんでした。が、女は和尚に頓着なく、じつと畳を見つめながら、ほとんど暗誦でもしているように——と云つて心の激動は、体からだ中ぢゆうに露あらわれているのですが——今日こんにちまで

の養育の礼を一々叮嚀ていねいに述べ出すのです。

「それがややしばらく続いた後のち、和尚は朱骨しゅぼねの中ちゅうけい啓けいを挙げて、女の言葉を遮りさえぎながら、まずこの子を捨てた訳を話して聞かすように促しました。すると女は不相変あいかわらず畳へ眼を落したまま、こう云う話を始めたそうです——

「ちようど今から五年以前、女の夫は浅草田原町あさくさたわらまちに米屋の店を開いていましたが、株に手を出したばかりに、とうとう家産を蕩尽とうじんして、夜逃げ同様横浜よこはまへ落ちて行く事になりました。が、こうなると足手まといなのは、生まれたばかりの男の子です。しかも生憎あいにく女には乳がまるでなかつたものですから、いよいよ東京を立ち退のこうと云う晩、夫婦は信行寺の門前へ、泣く泣くその

赤子を捨てて行きました。

「それからわずかの知るべを便りに、汽車にも乗らず横浜へ行く
と、夫はある運送屋へ奉公をし、女はある糸屋の下女になって、
二年ばかり二人とも一生懸命に働いたそうです。その内に運が向
いて来たのか、三年目の夏には運送屋の主人が、夫の正直に働く
のを見こんで、その頃ようやくよく開け出した本^{ほん}牧^{もく}辺^{へん}の表通りへ、
小さな支店を出させてくれました。同時に女も奉公をやめて、夫
と一しよになった事は元より云うまでもありますまい。

「支店は相当に繁^{はん}昌^{しょう}しました。その上また年が変ると、今度
も丈夫そうな男の子が、夫婦の間に^{あいだ}生まれました。勿論悲惨な捨
子の記憶は、この間も夫婦の心の底に、^{わだかま}蟠つていたのに違いあり

ません。殊に女は赤子の口へ乏しい乳を注ぐ度に、必ず東京を立ち退いた晩がはつきりと思ひ出されたそうです。しかし店は忙しい。子供も日に増し大きくなる。銀行にも多少は預金が出来た。

——と云うような始末でしたから、ともかくも夫婦は久しぶりに、幸福な家庭の生活を送る事だけは出来たのです。

「が、そう云う幸運が続いたのも、長い間の事じゃありません。

やつと笑う事もあるようになったと思うと、二十七年の春々々、

夫はチブスに罹つたなり、一週間とは床につかず、ころりと死ん

でしまいました。それだけならばまだ女も、諦めようがあつたの

でしょうが、どうしても思ひ切れない事には、せつかく生まれた

子供までが、夫の百ヶ日も明けない内に、突然疫癘で歿くなつた

事です。女はその当座昼も夜も気違ひのように泣き続けました。いや、当座ばかりじゃありません。それ以来かれこれはんとし半年ばかりは、ほとんど放心同様な月日さえ送らなければならなかったのです。

「その悲しみが薄らいだ時、まず女の心に浮んだのは、捨てた長男に会う事です。「もしあの子が達者だったら、どんなに苦しい事があつても、手もとへ引き取つて養育したい。」——そう思うと矢も楯もたてたまらないような気がしたのでしよう。女はすぐさま汽車に乗つて、懐しい東京へ着くが早いかな、懐しいしんぎょうじ信行寺の門前へやつて来ました。それがまたちようど十六日の説教日の午前だつたのです。

「女は早速庫裡くりへ行つて、誰かに子供の消しょう息そくを尋ねたいと思
いました。しかし説教がすまない内は、勿論和尚にも会われます
まい。そこで女はいら立たしいながらも、本堂一ぱいにつめかけ
た大勢の善ぜん男なん善ぜん女にょに交まじつて、日にっ錚そう和尚おしょうの説教に上うわの空そら
耳を貸していました。——と云うよりも實際は、その説教が終
のを待つていたのに過ぎないのです。

「所が和尚はその日もまた、蓮華夫人れんげふじんが五百人の子とめぐり遇つ
た話を引いて、親子の恩愛たつとが尊たつとい事を親切に説いて聞かせました。
蓮華夫人が五百の卵を生む。その卵が川に流されて、隣国の王に
育てられる。卵から生れた五百人の力士は、母とも知らない蓮華
夫人の城を攻めに向つて来る。蓮華夫人はそれを聞くと、城の上

の楼たかどのに登つて、「私わたしはお前たち五百人の母だ。その証拠しほはここに
 ある。」と云う。そうして乳を出しながら、美しい手に絞しぼつて見
 せる。乳は五百条すじの泉のように、高い楼上の夫人の胸から、五百
 人の力士の口へ一人も洩もれず注がれる。——そう云う天竺てんじくの寓ぐ
 意ういたん譚は、聞くともなく説教を聞いていた、この不幸な女の心に
 異常な感動を与えました。だからこそ女は説教がすむと、眼に涙
 をためたまま、廊下ろうか伝いに本堂から、すぐに庫裡へ急いで来たの
 です。

「委細いさいを聞き終つた日錚和尚は、囲炉裡いろりの側にいた勇之助ゆうのすけを招
 いで、顔も知らない母親に五年ぶりの対面をさせました。女の言
 葉が嘘でない事は、自然と和尚にもわかつたのでしよう。女が勇

之助を抱き上げて、しばらく泣き声を堪えていた時には、豪放ごうほう潤達かつたつな和尚の眼にも、いつか微笑を伴った涙が、睫毛まつげの下に輝いていました。

「その後の事は云わずとも、大抵御察しがつくでしょう。勇之助は母親につれられて、横浜の家へ帰りました。女は夫や子供の死後、情深い運送屋主人夫婦の勧め通り、達者な針仕事を人に教えて、つつましいながらも苦しくない生計を立てていたのです。」

客は長い話を終ると、膝の前の茶碗をとり上げた。が、それに唇は当てず、私の顔へ眼をやつて、静にこうつけ加えた。

「その捨兒が私です。」

私は黙つて頷きながら、湯ざましの湯を急須きゆうすに注いだ。この

可憐な捨児の話が、客 まつばらゆうのすけ 松原勇之助 君の幼年時代の身の上話だと

云う事は、初対面の私にもとうに推測がついていたのであった。

しばらく沈黙が続いた後、のち私は客に言葉をかけた。

「阿母さんおつかは今でも丈夫ですか。」

すると意外な答があつた。

「いえ、一昨年な歿くなりました。——しかし今御話した女は、私の母じゃなかつたのです。」

客は私の驚きを見ると、眼だけにちらりと微笑を浮べた。

「夫が あさくさたわらまち 浅草田原町 に米屋を出していたと云う事や、横浜へ行つ

て苦勞したと云う事は勿論嘘うそじやありません。が、捨児をしたと

云う事は、嘘うそだった事が後に知れました。ちやうど母が歿なくなる

前年、店の商用を抱えた私は、——御承知の通り私の店は綿糸の方をやっていますから、新潟にいがたかいわい界隈を廻つて歩きましたが、その時田原町の母の家の隣に住んでいた袋物屋ふくろものやと、一つ汽車に乗り合せたのです。それが問わず語りに話した所では、母は当時女の子を生んで、その子がまた店をしまう前に、死んでしまったとか云う事でした。それから横浜へ歸つて後、早速母に知れないように戸籍謄本をとつて見ると、なるほど袋物屋の言葉通り、田原町にいた時に生まれたのは、女の子に違いありません。しかも生後三月目みつきめに死んでしまつて居るのです。母はどう云う量りょうけん見か、子でもない私を養うために、捨児の嘘をついたのでした。そうしてその後二十年あまりは、ほとんど寝食さえ忘れるくらい、私に

尽してくれたのでした。

「どう云う量見か、——それは私も今日こんにちまでには、何度考えて見たかわかりません。が、事實は知れないまでも、一番もつともらしく思われる理由は、日錚和尚の説教が、夫や子に遅れた母の心へ異常な感動を与えた事です。母はその説教を聞いている内に、私の知らない母の役を勤つとめる気になったのじやありませんまいか。私が寺に拾われている事は、当時説教を聞きに来ていた参詣人からでも教わったのでしよう。あるいは寺の門番が、話して聞かせたかも知れません。」

客はちよいと口を噤つぶむと、考え深そうな眼をしながら、思い出したように茶を啜すすった。

「そうしてあなたが子でないと云う事は、——子でない事を知つたと云う事は、阿母おつかさんにも話したのですか。」

私は尋ねずにはいられなかつた。

「いえ、それは話しません。私の方から云い出すのは、余り母に残酷ざんこくですから。母も死ぬまでその事は一言いちごんも私に話しませんでした。やはり話す事は私にも、残酷だと思つていたのでしよう。實際私の母に対する情じょうも、子でない事を知つた後のち、一転化を来したのは事実です。」

「と云うのはどう云う意味ですか。」

私はじつと客の目を見た。

「前よりも一層なつかしく思うようになったのです。その秘密を

知って以来、母は捨児の私には、母以上の人間になりましたから
」。

客はしんみりと返事をした。あたかも彼自身子以上の人間だつた事も知らないように。

(大正九年七月)

青空文庫情報

底本：「芥川龍之介全集4」ちくま文庫、筑摩書房

1987（昭和62）年1月27日第1刷発行

1993（平成5）年12月25日第6刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房

1971（昭和46）年3月～1971（昭和46）年11月

初出：「新潮」

1920（大正9）年7月

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：j.utiyama

校正：かとうかおり

1998年12月19日公開

2012年3月22日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waizora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

捨児

芥川龍之介

2020年 7月12日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>